

『12月1日は、世界エイズデー』

世界エイズデー（World AIDS Day）は、世界レベルでのエイズのまん延防止と患者・感染者に対する差別・偏見の解消を目的に、WHO（世界保健機関）が1988年に制定したもので、毎年12月1日を中心に、世界各国でエイズに関する啓発活動が行われています。

♡ エイズについて知っていますか？

☆「エイズ」（AIDS）とは？

AIDSは、英語で Acquired Immunodeficiency Syndrome の頭文字をとったもので、日本語では、後天性免疫不全症候群と言います。

Acquired Immunodeficiency Syndrome
後天性 免疫不全 症候群
(生まれつきではない) (免疫の働きが低下している) (いろいろな症状の集まり)

☆「HIV」とは？

HIVは、英語で Human Immunodeficiency Virus の頭文字をとったもので、日本語では、ヒト免疫不全ウイルスと言います。

☆「エイズ」とはどういう病気なのか？

エイズはHIVというウイルスによって引き起こされる感染症で、体を病気から守っている免疫力を破壊してしまう病気です。健康な時には体の中に入っても病気を起こさないような弱い病原体（例えばカンジダとかカリニ原虫）に対しても抵抗力を失い、重症の肺炎や脳炎などを起こします。

☆「エイズ」の症状はどの様なものか？

エイズに感染すると、平均で6～8週間後には患者の血液中にHIV抗体が検出されます。その前にインフルエンザに似た急性の症状が出ることがありますが、大多数の感染者には、症状が出ることはありません。この急性症状は2週間ぐらいで自然に消滅して、無症状期（無症候性キャリア）に入ります。この無症状期は数ヶ月から10年以上にもわたり、外見からは感染していることがわからない状態です。

このような潜伏期を経て、しだいに免疫力が落ちてくると、主に発熱、下痢、寝汗、倦怠感、リンパ節の腫れ、体重減少といった症状があらわれ、持続することになります。このような状態をエイズ関連症候群と言います。

さらに進行してエイズと診断される状態になると、カリニ肺炎や食道カンジダ症などの日和見感染症、カポジ肉腫などの腫瘍、あるいは痴呆などの神経症状といった様々な症状が現れます。



アイヤン

☆日本と世界の現状は？

日本において2014年に新たに報告されたH I V感染者は1,091人、エイズ患者は455人、合計では1,546人で、これは過去3番目に多い数となっています。2007年以降、毎年1,500人前後の報告が続き、累計では26,000人を超えました。



世界において2014年末現在、3,690万の人々がH I Vとともに暮らしています。2000年以降、約3,890万人がH I Vに感染し、2,530万人がエイズに関連する疾患が原因で死亡しました。2014年に全世界で新たにH I Vに感染した人は200万人で、2000年の310万人から110万人（約35%）減少しています。15歳未満のこどもでは、2000年の52万人から22万人へと58%減少しています。エイズに関連する死亡者数は、最も多かった2004年の200万人から42%減少しましたが、いまなお全世界で120万人がこの病気により死亡しています。



レッドリボンを知っていますか？

“レッドリボン（赤いリボン）”は、古くからヨーロッパに伝承される風習のひとつで、もともと病気や事故で人生を全うできなかった人々への追悼の気持ちを表すものでした。

この“レッドリボン”がエイズのために使われ始めたのは、アメリカでエイズが社会的な問題となってきた1990年ごろのことです。このころ、演劇や音楽などで活動するニューヨークのアーティストたちにもエイズがひろがり、エイズで死亡する人々が増えていきました。そうした仲間たちに対する追悼の気持ちとエイズに苦しむ人々への理解と支援の意思を示すため、“赤いリボン”をシンボルにした運動が始まりました。

この運動は、その考えに共感した人々によって国境を越えた世界的な運動として発展し、UNAIDS（国連合同エイズ計画）のシンボルマークにも採用されています。

レッドリボンは、あなたがエイズに関して偏見をもっていない、エイズと共に生きる人々を差別しないというメッセージです。このレッドリボンの意味を知り、レッドリボンを身につけることによって、エイズのことをみんなで考えましょう。



エイズと人権

私たちの社会は、まださまざまな不平等や差別があり、弱い立場におかれている人がそうでない人々と共に生きていく状況にはなっていません。H I Vやエイズへの偏見や差別も例外ではありません。H I V感染者やエイズで苦しんでいる人たちが受け入れられる社会にしていくためには、私たち一人ひとりが、H I Vやエイズは特別な病気ではなく、自分自身にも起こりうる問題であることを認識して、「自分がH I Vに感染して、こんな偏見・差別を受けたらどんな気持ちがするだろう？」と考えることが大切です。

H I V感染者やエイズ患者が差別されずに共に生きていく社会とは、弱い立場におかれた人たちが生きやすい社会です。それは私たちにとっても生きやすい社会なのです。

病気や障害などのハンディキャップをもった人たちと、共に支えながら生きていけるやさしい社会を作るために、まず私たち一人ひとりが考え、行動していくことが大切ではないでしょうか。

担当は1年次2組・3組でした。

次回の放送は、1月13日です。お楽しみに・・・